第四節　古社寺宝物調査への参加

調査における東京美術学校職員

明治二十年十一月二十八日、特命全権公使九鬼隆一が帰国した。翌二十一年二月十日、フェノロサ、岡倉らの美術学校計画が危機に直面していた時期に、九鬼は宮内省図書頭に就任し、図書寮附属となっていた博物館（館長山高信離）事業を掌中に収め、フェノロサ、岡倉と連繋して古美術保護行政の推進に乗り出した。彼らの目標は大規模な帝国博物館の設立と文化財保護に関する法律の制定であり、その準備として、二十一年春から秋にかけて組織的な古社寺宝物調査を実施した。今回の調査はかつて無い大がかりなもので、明治十七、十九年のフェノロサ、岡倉らによる調査の成果を土台にして徹底的に行われた。調査団は九鬼隆一（宮内省）、丸岡莞爾（内務省）、浜尾新（文部省、東京美術学校）ら高官を筆頭に、フェノロサ（東京美術学校）、岡倉覚三（同）、今泉雄作（同）、ビゲロウ、山県篤蔵（宮内省）、稲生真履（同）、八木雕（内務省社寺局）、伊藤景裕（同）、川田剛（内閣修史局）および東洋美術、学術の専門家、官報および各新聞社特派員、小川一真（写真家）らによって構成され、五十日間の予定で二十一年五月五日に一行は東京を発った。調査は和歌山県下（十日間）、奈良県下（一ヵ月）、京都府下（二ヵ月余）と順次進められ、その間、八月中旬には正倉院も視察し、予定期間を遥かに超過した九月初旬、一時休止のかたちで帰京の途についた。一行が巡視した社寺および蔵幅家の数は約四百三十件、調査品目は三万六千二百余点に及び、また、調査の進行状況は逐次『官報』に登載され、新聞もこれを報道した。

この調査には上記のように浜尾以下東京美術学校幹部職員全員が参加したが、高屋肖哲はほかに伊東乾谷、岡崎雪声、竹内久一、岡倉秋水、岡不崩および高屋肖哲らも随行し、狩野芳崖、狩野友信、藤田文蔵、長沼守敬らは東京に留まったと述べている（「座談会の後に」前出）。伊藤乾谷と岡崎雪声は東京美術学校開校後教員に採用されるが、既にこの頃から関係していたらしい。ちなみに雪声の履歴書（本学蔵）に「仝廿一年　京阪地方古寺院銅像製作ヲ研究ス」とあり、それはこの調査に随行したことを指すと思われる。竹内久一はこの時点では既に東京美術学校雇となっている。秋水、不崩、肖哲については再言を要しない。なお、二十年末に同校雇となり、奈良で彫刻教育の参考品の製作に従事していた加納鉄哉も、当然一行に加わったと考えられる。

このように東京美術学校関係者が大挙参加したのは、同校開校準備の必要上からであった。その点については『万報一覧』（第一八八号。明治二十一年九月十五日。鴻盟社）も「一行が畿内美術取調の用を帯びて數箇月を費したるハ全く美術學校設立に付學則の方針を定むるに古代の美術を斟酌する處もあるべく又教授の材料を集むるの目的もありしならんか」と報じている。